

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

令和3年 4月 1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 : 文学研究科

職 名 : 准教授

氏 名 : 津田 謙治

助 成 の 種 類	令和 2 年度 ・ 研究活動推進助成			
申請時の科研費 研究 課 題 名	初期キリスト教思想におけるストア主義的自然観の受容と批判			
上記以外で助成金 を 充 当 した 研 究 内 容	なし			
助成金充当に関 わる共同研究者	(所属・職名・氏名) なし			
発表学会文献等	(この研究成果を発表した学会・文献等) ・コロキウム・パトリステイクム(発表)、古代人の感情に関する共同研究(発表) ・『キリスト教学研究室紀要』(文献・公刊) ・"Zeitschrift fuer Neuere Theologiegeschichte"(文献・公刊)			
成 果 の 概 要	研究内容・研究成果・今後の見通しなどについて、簡略に、A4版・和文で作成し、 添付して下さい。(タイトルは「成果の概要／報告者名」)			
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	1,000,000	円	
	使用した助成金額	1,000,000	円	
	返納すべき助成金額	0	円	
	助成金の使途内訳	費 目	金 額	
		研究資料購入(和書)	309,084	
		研究資料購入(洋書)	223,490	
		機材購入(スキャナ等)	409,490	
旅費		0		
その他(文献取寄等)	57,936			
当財団の助成に つ い て	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) この度は、研究を助成して頂きまして、心より感謝申し上げます。申請書にて記載させて頂きましたが、大学を異動してすぐの科研費の結果が不採択であったため、機材や資料をすべて新たに揃えなければならない状況の中で、このような助成をして頂いたことで本当に助かりました。助成金の使途などについては自由度が高く、特にこの制度について要望等はございません。貴財団のこの制度によって、一人でも多くの研究者が、未来の研究への発展に繋がられることを心よりお祈り申し上げます。			

令和2年度京都大学教育研究振興財団
研究活動推進助成 「成果の概要」

令和3年 4月 1日

成果報告者 京都大学文学研究科・准教授 津田謙治

「成果の概要」

【研究内容】

本研究は、神が世界に働きかける在り方をめぐって、古代キリスト教の思想家たちがストア主義的な哲学者たちの議論にどのように応答したかを考察することを目的とする。聖書的な神を信奉する思想家たちは、世界における神の摂理や遍在を説明する際に、「ロゴス」や「オイコノミア」、「場所」や「質料」というストア主義の中で議論された概念を用いて哲学者たちの教説に向き合い、宗教が信仰だけでなく理性と合理性に適う可能性を追求した。ここでは特に、「世界」や「神」などに関わる、初期キリスト教時代から古代末期におけるストアの自然学的な考え方に限定し、これらの概念に関係する議論の分析を通じて、宗教的思考と哲学的思考との間の議論の相違を明確にすると共に、両者の間で対話が成立するための調和的な視点を描くことを目指す。それによって、宗教哲学における新たな総合的視座の構築に寄与することを試みる。

【研究成果】

上記の研究内容に基づき、また関連しながら、本助成によって以下の研究成果を発表ないしは公刊した。尚、(5)は2021年度内に公刊予定である。

- (1) "Liberal Protestantism and Christian Studies at Kyoto University: A Case Study of Tetsutaro Ariga", in: *Zeitschrift für Neuere Theologieggeschichte*, 27(1), 2020, pp.12-19. (招待有り)
- (2) 「天使としての神の顕現 — ノウァティアヌスにおける神的場所の議論」
『キリスト教学研究室紀要』9-1, 2020, pp.1-19.
- (3) 「テルトゥリアヌスにおける罪と魂」コロキウム・パトリスティウム (於：京都大学) 2020年10月24日 (招待有り・口頭発表)。
- (4) 「神の怒りへの弁証 — マルキオンに対するテルトゥリアヌスの議論の位置付け」
古代人の感情に関する共同研究 (於：京都大学) 2020年12月21日 (口頭発表)。
- (5) 「靈魂伝遺説と原罪 — テルトゥリアヌスの魂概念を手掛かりとして」
『「原罪論」の形成と展開』知泉書館、2021年公刊予定。

【今後の見通し】

本研究の今後の見通しであるが、助成金によって購入させて頂いた資料を基に、特にギリシア語・ラテン語文献の読解を進め、古代キリスト教とストア哲学の連関を分析する予定である。具体的には、既に上記で挙げた(5)の公刊を進めると同時に、関連する20世紀前半の文献の翻訳(既に初校を出版社に引き渡し済み)を完成させ、2021年度の夏から秋にかけて学術大会での発表によって研究成果を報告する(一つは6月のシンポジウムに登壇することが決定している)。また、2021年度末までには、学会誌及び学内紀要にて研究成果を刊行する(一つは2022年3月の学内紀要に掲載が決定している)。